

『ベートーヴェンの生涯 (Vie de Beethoven)』論 (上)

＜ロマン・ロランの伝記作品研究＞〔一〕

—「歓喜—神」への信仰 (La foi en un Dieu-Joie)—

三木原 浩

《ベートーヴェンの芸術と魂のふもとと頂には、「神」がおわします。》

(ロマン・ロラン：『ベートーヴェン』研究、「フィニタ・コメディア」より、p. 1382.)

〔I〕. ロマン・ロランとベートーヴェンの出会い

ロマン・ロランの生涯は、音楽のよろこびとなぐさめに満ちていた。悲しみのとき、音楽はやさしく彼にほほえみかけたし、苦しみのとき、音楽は彼の勇気をげしく鼓吹した。彼にとって、音楽はつねに希望の調べであり、彼と彼のもとにつどうすべての人びとを結ぶ、《愛》と《真実》の響きであった。彼は音楽によって自己に語り、音楽の心によって世界に語りかけた。そしてなによりまず、彼は、《音楽の魂》を抱いて生きた。(1)

そのような人の初めての音楽的体験、あるいは音楽的啓示とでもいうべきものを、遠くその幼い日にまでさかのぼって見いだすことができるとき、その発見は、驚きであるとともに、人生へのなにかしら確かな感情と、かぎりない安心感を私たちにあたえる。

幼年時代のロマン・ロラン。彼は自らそう呼ぶところの《三重の獄舎》—— ゆううつで暗くて旧い家、気管支炎に起因する胸の圧迫感、不吉でそれでいて力強く浸み入る死の想念——の中に幽閉されていた(2)。《幼児の彼の心に浮かんだ最初の問い》(3)は、その不健康で、孤独な、《三重の獄舎》の只中から生じる。

《ぼくはどこから来たのだろうか？ そしてぼくが閉じ込められているのはどこだろうか？... ぼくはとらわれの身 (prisonnier) だ！》(4)

小さなロラン、虚弱なロラン。自らが《とらわれの身》であることへの痛切な自覚が、彼を深く傷つける。彼は窒息しかかっている。彼は、救いを、解放を、待ちのぞんでいる。

そんな彼の前に、ある日突如、解放の手があらわれる。それは、鳴りひびくサン・マルタン教会の鐘の音(les cloches de Saint-Martin)。．．．その鐘の音は、空中を自在に飛翔する自由な鳥の歌声を思わせる。後年、ロランは、彼の『内面の旅路』の中で、次のようにふりかえっている。

《それ[サン・マルタンの鐘の音]は、『ジャン・クリストフ』の最初の幾ページかで歌う。私はその音楽を、私の無意識の心の中に刻み込んだ。》(5)

この鐘の音、この鐘の《音楽》。それが病身のロランの心に呼びさましたものは、薄暗い聖堂の内部にとめおかれたあの「神」ではけっしてない。それは、天空を自在に天翔けるひとりの「神」——《「自由なる神」(le Dieu-Liberté)》(6)であった。

いまや彼は感じている、「神」は《音楽》の中にいると。いまや彼は知っている、その《音楽》は、彼自らの内で奏せられていることを。そして、この「神」は、この《音楽》は、いつの日にも彼からたち去ることはないだろう。

《．．．私[ロラン]の生涯の「善き女神」、すなわち「音楽」．．．》(7)

《音楽》は、このように、ロラン自身の内部にあって、彼自身と深く結び合っていたのである。

彼は、彼の『回想記』の中では、次のようにも追想している。

《音楽は、私の人生の第一歩から私の手をひきました。音楽は、私の初めての愛であり、そしておそらく最後の愛となるでしょう。女性への愛がどんなものかをよく知らないうちに、子供の私は、ひとりの女性を愛するように音楽を愛しました。》(8)

成長するにつれて、多くの偉大な音楽家たちが、彼の心をつよく捉える。バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、そしてワグナー等々が．．．

しかし彼の音楽への愛が、《ひとりの女性への愛》にも似ているならば、その愛が、ある特定の対象に向けられたとしても不思議はない。

青年期のはじめ、まず、ことのほか強く彼を捉えたのは、モーツァルトであった。モーツァルトの知性と感性の、繊細さが、優美さが、彼のそれに照応する。モーツァルトの美しい音楽から流れでる神秘的な魅力が、彼の身内を走りぬける。悲しみの中に微笑をたやさぬモーツァルト、喜びの中に平静を忘れぬモーツァルト。モーツァルトの精神世界は、彼のそれに驚くほど近い。彼は、『回想記』の中で、次のように証言している。

《ほんとうに、その年頃では、私は自分を心底モーツァルトに似ていると感じていました。彼の音楽は、私にとって自然な表現であり、それが〔ピアノを弾く〕私の指の下から、泉のように湧きでてくるのを感じていました。私は当時オリヴィエでした。その後クリストフがやって来ました。私は変わりました。．．．》(9)

あるいはまた、同書の別のところでも、次のように書いている。

《音楽において、その当時の私のベートーヴェンにたいする不当を知ったら、人はずいぶん驚くでしょう。私が彼〔ベートーヴェン〕に謝りを述べたのは、イタリア留学の二年目のことにすぎませんでした。そのころの私のお気に入り、J.-S. バッハと、グルックと、モーツァルトでした。私はモーツァルトを熱愛していました。》(10)

そのようなモーツァルトへの愛が、生涯、ロランの心から消え去ることはなかったにせよ、やがて彼の心には、ある《変化》— 《私は変わりました。．．．》— が訪れる。その《変化》とは、彼の広大な内面世界をいっそう押しひろげ、彼自身がそれまで自覚していなかったその世界の幽暗な部分に、新しい真実の光が射し込むことを意味しよう。そしてこの《変化》をもたらした人、その人こそはベートーヴェンであり、このベートーヴェンへいざなった人、その人こそはマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークである。

ロランがはじめてマルヴィーダと会ったのは、1889年夏、彼が23才、イタリア留学に旅立つ直前のことであった(11)。ロランは彼女の前でピアノを弾く。彼の指

先からベートーヴェンの音楽は流れでる。その音楽がもつ無限の親和力が、無言のうちに、彼と彼女の魂を結びつける。偉大な精神の音楽を共に感じ、共に生きること。若い魂と老いた魂の、真実の静かな語り、真実のなごやかな相互理解がそこにある。

そのような二つの魂のあいだに生まれた《共感》(Sympathie)は(12)、最初《おぼろで》やがて確かな形をとりはじめ、彼ら二人が思う思いを、夢見る《夢》を、一瞬のうちに交錯する一つの美しい《微笑》の中に結晶させる。ロランは、『内面の旅路』のなかで、そのなつかしい思い出を次のように語っている。

《．．．その注意深い眼差しで聴き入っていた優しい老婦人〔マルヴィーダ〕と、その指でピアノを歌わせていた若い青年〔ロラン〕とのあいだで、あるおぼろな共感が形をとりはじめていた。しかし私たち二人のために語っていたベートーヴェンのその声は、二人のうち一人の夢の小舟を過去の方へと押し進め、もう一人の夢の小舟を未来の方へと押し進めた。彼女の夢の小舟には死者たちへの哀悼が積まれており、私の夢の小舟には期待が積まれていた。二そこの小舟はすれちがった。一つの微笑が交わされた。一瞬の微光．．．
—「私はかつてこんなだった．．．」—「やがて私はこんなふうになるだろう．．．たぶん．．．」》(13)

まだこれからの長い自分の人生を歩まねばならぬ青年と、もう十分に生きて、やがて去りゆくであろう老婦人との清澄な出会い。過去をやさしく回想する彼女と、未来を遠く眺めやる彼とが、現在の瞬間のうちに深く結び合う。この瞬間は、かぎりなく美しく、かぎりなく神秘的である。なぜなら、彼らの二そこの《夢の小舟》がすれちがった後も、彼は彼女のなかに予感されつづけ、彼女は彼のなかに生きつづけるであろうから。そしてそんな二人を、言葉の沈黙とベートーヴェンの音楽の調べとが、やさしくつつみこむ。

さらにロランのイタリア留学が、彼らの友情をいっそう深めるのに寄与する。彼女の家を訪れて弾くロランのピアノは、彼ら二人にとって無上のよろこびであり、なぐさめであった。ロランは、『内面の旅路』の別なところで次のようにも回想している。

《．．．彼女が私のために借りたピアノで、一時間ばかり、バッハのカンタ

一ター曲と、ベートーヴェンの後期のピアノ・ソナター曲、あるいはミサ・ソレムニスを、私は弾き終えたばかりだった。一言も交わされはしなかった。私の横顔をながめながら、彼女は、私の不動の顔の透明な幕を通してあらわれる音楽のドラマの進行に従っていた。沈黙のうちに、私たちは、ベートーヴェンの十字架への道をたどりながら、彼の「受難」を伴奏していた。最後の音譜が鳴り終わった。．．．私たちは、相変らず無言だった。語ることは不可能だった！ 音楽によってすべてのことを語ったばかりのとき、言葉に出すことが何の役にたとう．．．私は、ふたたび息を吸いこんだ。そして彼女は、静められた精神がふたたび日常の考えにもどってくるのを、ランプの穏やかな光の輪の中で待っていた。彼女は、無言で微笑みながら、私を見つめていた。》(14)

ベートーヴェンの楽譜が、ロランに新しい意味を、新しい生命を開示する。記された音符の一つ一つが、彼ベートーヴェンの《音楽的魂》のよろこびとかなしみの、くるしみとやすらぎの凝集にほかならない。そして、それらの音符がひとつずつ、ロランの指先から、生きた音となってこの世に生まれ出るとき、諸々の音は、無限のニュアンスをおびながら、連なり、結ばれあって楽節となり、やがては曲の全体を構成する。したがってこの魂の音の進行こそが、ベートーヴェンの《音楽のドラマ》であり、内面の崇高な悲劇なのである。

このドラマを、《音楽的魂》と詩的直観によって、一步一步、着実に辿ること。その行程の只中に、ベートーヴェンの魂の軌跡を、彼固有の《思想》を探し求めること。そしてついに、その《思想》をさぐりあてた時、私たちは、はじめて彼の世界を自らの内に実現し、追体験し、《共感》という清澄な泉のなかに身をゆだねることができるのである。

ロランは、1891年3月14日付の母宛の手紙の中で、次のように言っている。

《私は、昨年よりもはるかにベートーヴェン派になりました。．．． [ベートーヴェンの] 一つ一つの楽節をたどりながら、その各々の楽節の内に表現された思想を読みとることができるように、私には思えるのです。それは、あたかも一冊の小説、それも叙事詩的小説を読む場合のように、興味あることです。》(15)

このように十九世紀の偉大な理想主義者マルヴィーダの啓示力によって、真の理解にまでみちびかれたベートーヴェンの音楽は、その後、一度もロランを離れることはなかった。それどころか、ベートーヴェンは、人生の戦いにおいて、幾度か彼を救い、彼を支える最愛の伴侶となったのである。彼の死後、詩人のポール・クロードも、次のように証言している。

《．．偉大なベートーヴェンの声、その声は、彼ロランの生涯を通して、彼を魅惑することをやめなかった。》(16)

ところで、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書くにいたった直接の動機に、彼の経験したもっとも激しい精神の危機 — 妻クロチルドとの離婚 — があげられよう。彼は深く苦しみ、傷ついた。なぜなら彼は、《なにものにもまして》妻を愛していたからである(17)。1901年3月5日付のマルヴィーダ宛の手紙の中に、ロランは、彼の深い反省と、妻への尊敬と、そして悲しみに打ち勝つべき彼の決意とを書き記した。

《．．私は、私が彼女にたいして抱いた愛と、苦しかった幾多の日々に彼女が私にとっての支えであったことを、けっして忘れはしないでしょう。彼女の性質はしばしば私を苦しめました、けっして彼女の意志ではありませんでした。私は日々ひたしの空虚さを仕事でみたそうとしています。私は今までのところ、そうすることにほとんど成功しておりません。私は、時がたち、危機がどれほど苦しいものであろうとも、それに必然的につづく精神の回復期に期待しています。》(18)

この危機から逃れるために、この苦痛から身をひきはなすために、いまロランが求めるものは、ひとりの「救い主」である。

ロランは、その「彼」をたずねてパリを去り、ドイツへ渡る。ボンにある「彼」の生家を訪れ、その遺品に面影を見いだす。つぎにマインツに赴き、旅行の最大の目的の一つであったベートーヴェン記念音楽祭に出席し、ワインガルトナーの指揮する「彼」の交響曲演奏を聴く(19)。さらにコブレンツでは、「彼」の親友だったヴェーゲラーの孫たちと会い、しばし語らいの時をもつ。

崇高な音楽の只中から蘇る「彼」ベートーヴェン。それは、生きているベートー

ヴェンである(20)。彼の音楽からは、つねに、生きることへの尽きせぬ《力》と、真正の《信仰》が湧きあがってくる。それ故、ロランは、晩年に書き終えた『フィニタ・コメディア』の中で、次のように書いている。

《ベートーヴェンは、そこにいる、— 私たちの後方ではなく、前方にいる。彼は、永遠の前進を放棄する人びと、つまり人類の十字架への道を放棄する人びとに属してはいない。試練のとき、私たちは、いつも自分の傍らに彼を見いだしてきた。．．． 困惑あるいは決断のとき、力と信仰の尽きせぬ泉であるその音楽から、どれほど多くの他の伝言が私たちの心にやってきたことか!》(21)

たしかにロランは、ベートーヴェンの音楽から、生きる勇気と慰めを汲みとることができた。しかし彼の関心は、しだいに、芸術家ベートーヴェンから人間ベートーヴェンへと移行する。なぜなら、文字通り《英雄精神》に満ちた受難の生涯を送ったのは人間ベートーヴェンにほかならないし、また偉大な芸術家は、つねに《もっとも人間的》な存在であるはずだからである。ロランは、そのベートーヴェン研究の『復活の歌』序文の中で、人間と芸術にふれて次のように言っている。

《．．． なるほど、もっとも人間的なものが、かならずしも芸術家ではない。だが、もっとも偉大な芸術家たちは、いつももっとも人間的である。なぜなら、彼らはもっとも広大な場を抱擁しているのだから。芸術の尺度、それは人間である。》(22)

《霧につつまれたラインの岸边》(23) — 沈黙と静寂がただようその世界の中心に、ロランはただひとり没入し、彼のベートーヴェンと一対一で語りあう。魂と魂の真摯な対話。永遠の時が流れる．．．。二つの魂は混り合い、溶け合い、やがて一つに合一する。法悦が支配し、自他の区別は消えうせる。いまやロランの苦悩がベートーヴェンの苦悩であり、ベートーヴェンの勇気がロランの勇気である。

ロランは救われる。ベートーヴェンが、彼に生への信仰を回復させたのである。生きること、生きつづけること、救いの真の姿は、その時はじめて明らかにされるだろう。

このように、彼の『ベートーヴェンの生涯』は、ロラン自らそう述べているよう

に、《傷ついた魂の歌、窒息していた魂が、ふたたび呼吸をとりもどし、ふたたび立ちあがり、「救い主」に感謝して捧げた歌》(24)なのである。そしてこの『ベートーヴェンの生涯』は、出版されるや、予期せぬほどの勢いでヨーロッパに広まった。そのことは、ちょうどロランが、ベートーヴェンの音楽とその生涯のなかに、生きる《力》と《信仰》—《人生と人間とにたいする人間の信仰》(25)—とを見いだしたように、ヨーロッパの読者たちもまた、この作品のなかに、同じものを認めたという事実を示している。

以上、私たちは、ロランとベートーヴェンの出会い、時空を超えた魂と魂の交感を、簡単ながら見てきた。そこでつぎに、ロランの『ベートーヴェンの生涯』の作品分析に入るが、私たちがその分析で明らかにしようとするのは、歴史的に正確な事実と、厳しい資料批判だけからなる実証主義的なベートーヴェンの生涯ではけっしてない。ロランも、『ベートーヴェンの生涯』の序(1927年3月)のなかで次のように言っている。

《この讃歌〔『ベートーヴェンの生涯』〕のなかに、歴史学の厳格な方法によって書かれた学問的な著作をもとめようとする今日の人びとの要求に答弁しておかねばならない。．．．この『ベートーヴェン(の生涯)』は、学問のために書かれたわけではない。》(26)

それ故、私たちが以下に試みようとするのは、すでに拙論<ロマン・ロランの伝記作品研究>序説(27)において明らかにしたようなロラン独自の意図と方法によって再創造された一人の人間ベートーヴェンの《英雄精神》と、彼が究極的に到達する彼自身の「神」、彼固有の「信仰」についてである。

(つづく)

〔註〕

- (1) ロランは、彼の『内面の旅路』のなかで次のように述べている：《生まれつき音楽的な私〔ロラン〕は、私の存在の対立しあうさまざまな要素と、それらの諸法則とから、響きのよい総合を実現しようと、全生涯じゅう努めてきた。その二つの法則。— その第一は、「眞実(理)」である。それは本質的なものであり、それなくしては、人生のもっとも美しい顔も一つの仮面に

すぎなくなり、人生のあらゆる勝利も、一つの不名誉にすぎなくなる。．．．
自己にたいして真実であること。自分が真実であると信じていること以上の、
また以下の一言もけつして言わないこと。生の炎と諸情熱とが燃えあがろう
とも、それらに精神の正直さをけつして食われないこと。肉体の感乱と心の
手管のなかにあつても、明かるい視力を保つこと。第二の法則は、「愛」で
ある。人間的な「愛」である。．．．愛すること．．．ともに楽しみ、そし
てともに苦しむこと．．． — 「共感」の法則．．． これら二つの法則は、
深淵の上で、おたがい、しばしば衝突する。ああ！ その悲劇的な、情熱的
な、美しい不協和音。それはあたかもベートーヴェンが、彼の交響曲のなか
で、ベートーヴェン自身にまじえている戦いの一つのようなものである！ この不
協和音は心をひき裂くが、しかし心を押しひろげる。さあ、とどろけ、
私のパイプオルガンよ！ 私はおまへのペダルと鍵とを、私の手と足との下
で制御するだろう。反抗する風たちをひとまとめにたずなにしばりひきしめ
るだろう。私は、「愛」と「真実」という二つの奔流を、同じ河床に横たえ
るだろう。．．． 私は大いに戦った。その戦いは、大きな和音の一部をなし
ている。オルガン弾きの巨匠よ！ この和音を鳴りひびかせたまえ！ あな
たの指を鍵盤の上で歌わせたまえ！．．． 私の生涯を、「調和」のなかの一
つの音符となしたまえ！» (Romain Rolland, *Le Voyage Intérieur*,
p.235.)

- (2) ロランは、彼の『内面の旅路』のなかで次のように述べている：«旧い家と
圧迫されている私の胸と死の不吉な環とからなるこの三重の獄舎 (triple
prison) のなかで、幼児の私の最初の意識は発生した。．．． » (R.R.,
Le Voyage Intérieur, p.21.)

ところで、彼の«圧迫されている胸»とは、気管支炎のことをさすが、こ
の気管支炎は、彼が生後一年にも満たぬころ、若い女中さんが不注意にも彼を
冬の寒さのなかに置き忘れたことに起因している。以来この病氣と、それに
ともなう呼吸困難とは、生涯ロランにつきまとった。(Cf. *Ibid.*, pp.19—
20.)

また、«不吉な死の環»とは、ロランが5才の時、3才の妹のマドレーヌ
がジフテリアにかかり、短時日のうちに幼い生命を失うといった経験をした
こと、またその死にともなう母の深い悲しみを目撃したことに、その大き
な要因が見いだされよう。(Cf. *Ibid.*, pp.20—21, pp.24—26.)

(3) R.R., *Le Voyage Intérieur*, p.19.

(4) *Ibid.*, p.19.

(5) *Ibid.*, p.22.

Cf. R.R., *Jean-Christophe, L'Aube*, p.10 : «サン・マルタン教会の鐘の音が、夜のなかで歌った。その歌声は、重々しくゆったりとしていた。雨にしめった空気のなかを、その歌声は、こけの上を歩く足どりのように伝わってきた。子供は、泣きじゃくっている最中に黙りこんだ。その靈妙な音楽が、乳の流れのように、こちよく彼の内に流れこんだ。夜は輝き、空気はやさしく、あたたかだった。彼の苦しみは消えうせて、心は笑いだした。そして彼は安堵の息をつくと、夢のなかにすべりこんだ。»

(6) *Ibid.*, p.22.

(7) *Ibid.*, p.95 : «... la Bonne Déesse de ma vie : la Musique.»

(8) R.R., *Mémoires*, p.148.

(9) *Ibid.*, p.159.

(10) *Ibid.*, pp.122-3.

(11) ロランをマルヴィーダに紹介したのは、ガブリエル・モノー教授 (Gabriel Monod) である。ロランは、『内面の旅路』の中で次のように言っている : «私 [ロラン] は、最初、1889年の夏、ヴェルサイユで彼女 [マルヴィーダ] に会った。私の先生であり友人でもあったガブリエル・モノーが、ヴィラ・アミエルと呼ばれる彼の家で、私を彼女に紹介した。私は、その一ヶ月後にローマに向けて出発する予定だった。... » (R.R., *Le Voyage Intérieur*, p.143.)

(12) Cf. Le Robert : “Sympathie. n.f. (1420 ; empr. lat. *sympathia*, « fait d'éprouver les mêmes sentiments », du gr. *sympathia*, proprement. « participation à la souffrance d'autrui ».)

また本論文の [註] (1) をも参照のこと。

(13) R.R., *Le Voyage Intérieur*, p.143.

(14) *Ibid.*, p.147.

(15) R.R., *Cahiers Romain Rolland 8, Retour au Palais Farnèse*, p.257.

(16) R.R., *Cahiers Romain Rolland 2, Correspondance entre Louis Gillet et Romain Rolland, Préface*, p.11.

(序文は、ポール・クローデル [Paul Claudel] が寄せている。)

- (17) ロマン・ロランは、1901年6月14日付のマルヴィーダ宛の未刊の手紙の中で、次のように述べている：「私はあの妻をなにもものにもまして愛しておりましたので — (この世の外のもの除きまして) — なによりもまず、私とその心をつかみ、救いたかったのは彼女なのです。私は私の妻のために善いことをするのに完全に失敗しました。」 (*La Conception de la Vie Héroïque dans l'Œuvre de Romain Rolland*, p.87. Cité d'après Miriam Krampf.)
- (18) R.R., *Cahiers Romain Rolland 1, Choix de Lettres à Malwida von Meysenbug*, p.298.
- (19) ロランは、1901年4月18日付のマルヴィーダ宛の手紙に、次のように書いている：「したしい友、私はあなたにお話しいたしましたベートーヴェンの音楽祭のために当地〔マインツ〕へまいりました。ワインガルトナーが九つの交響曲演奏の指揮をしています。彼の解釈には、私のがぞむような単純性とナイーブな深さは見られないのですが、少なくとも各作品に、かなり彫刻的な形式と強く心をとらえる浮彫りとをあたえています。— またいくつかの四重奏、三重奏、協奏曲、それに『なき愛するものに寄せる歌』も演奏されます。」 (R.R., *Cahiers Romain Rolland 1, Choix de Lettres à Malwida von Meysenbug*, pp.298-9.)
- (注) ワインガルトナー [Félix von Weingartner, 1863-1942] は、オーストリアの指揮者、作曲家。
- (20) Cf. R.R., *Beethoven, Le Chant de la Résurrection, Introduction*, p.440 : « — 生きているベートーヴェン . . . 死んでいるベートーヴェン . . . 死んでいる彼を愛そう！ なぜなら彼は生きているからである。 »
- (21) R.R., *Beethoven, Finita Comœdia*, pp.1342-3.
- (22) R.R., *Beethoven, Le Chant de la Résurrection, Introduction*, p.440.
- (23) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p. 8 : « 雨の多い四月の灰色の日々に、霧につつまれたラインの岸辺で、私はベートーヴェンとただ二人きりでいて、私の心の思いを告白し、彼の苦しみと彼の勇気と、彼の悩みと彼の歓喜とにすっかり心を浸され、ひざまずいた私は、彼の強い手によってふたたび起こされた . . . »
- (24) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.9.
- Cf. 但し、ロランは後年、彼の『内面の旅路』のなかで次のように述べてい

る：《．．．『ベートーヴェンの生涯』は、私の生涯の一危機から生まれ
た娘であり、苦悩と諦念と禁欲的な諸力とのこの新しい結合から生まれ
た長女であるが、それはその兄弟姉妹としてその後生まれた他の二つの『生
涯』（ミケランジェロとトルストイのそれ）、および十巻からなる『ジャン
・クリストフ』と同様、つねに動いている一つの人生における過渡的な一時
期の価値しかもっておらず、その本のでた前後のいろいろな時期を理解する
ことによって、はじめて十全に理解されるのだということに、世論はちっと
も気づかなかったのである。》（R.R., *Le Voyage Intérieur*, pp.242-3.）

(25) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.18.

(26) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, pp.8-9.

また同序文の脚註に、ロランは次のように書いている：《著者〔ロラン〕は、
ベートーヴェンの芸術と彼の創造的人格の研究に、いっそう正確な歴史的、
技術的性格をともなった他の作品〔『ベートーヴェン』研究のこと〕をささ
げようと思っている。》（Ibid., p.10.）

(27) 拙論<ロマン・ロランの伝記作品研究>序説 — ロマン・ロランの伝記作品に
おける「偉人」または「英雄」について — を参照のこと。（京都大学フラ
ンス語学フランス文学研究室発行、「仏文研究Ⅱ，1977」所収。）

（付記）

本論文中の引用に関しては、原則として筆者拙訳によったが、訳語などの選定にお
いて、下記邦訳を適宜参照させていただいた。

ロマン・ロラン全集〔全35巻、別巻1巻〕（みすず書房）

『ベートーヴェンの生涯』（岩波文庫、片山敏彦訳）、（角川文庫、新庄嘉章訳）。

なお、本論文中に使用した記号については以下の通りである。

《 》は引用箇所。（．．．）は省略。語の上に付された（・・・）は筆者
による強調。〔 〕は筆者による補足。「 」（ ）でかこまれた語は、フラン
ス語で表現した場合、大文字を使用すべきもの（ex.「神」：Dieu）

参 考 文 献

参考とした文献は多数にわたるため、本論文中（以上までのところ）に引用した

ものにかぎって明示する。

I. — ロマン・ロランの作品

Vie de Beethoven, Hachette, Paris, 1950.

Beethoven, Albin Michel, Paris, 1956.

Jean-Christophe, Albin Michel, Paris, 1967.

Le Voyage Intérieur, Albin Michel, Paris, 1959.

Mémoires, Albin Michel, Paris, 1956.

Cahiers Romain Rolland 1, Albin Michel, Paris, 1948.

Cahiers Romain Rolland 2, Albin Michel, Paris, 1949.

Cahiers Romain Rolland 8, Albin Michel, Paris, 1956.

II. — ロマン・ロラン論

Miriam Krampf: *La Conception de la Vie Héroïque dans l'Œuvre de Romain Rolland*, Le Cercle du Livre, 1956.